

「ある金持ちがいた。紫の布や上質の亜麻布を着て、毎日、派手な生活を楽しんでいた。この金持ちの門前に、ラザロという出来物だらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼の出来物をなめていた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、アブラハムとその懷にいるラザロとが、はるかかなたに見えた。」（ルカ16：19～23）

ある金持ちがいて、彼は上質の着物を着、美味しい食事をし、豪勢な生活を満喫していた。その金持ちの門前に、栄養に欠け体中に出来物のある、貧しいラザロという人がいた。彼は金持ちの食卓から落ちる食べ物で腹を満たしたいと思うほどであった。犬も来て、彼の出来物を舐めていた。貧しいラザロは死んで、天使たちによって、アブラハムの懷に連れて行かれた。彼は信仰を持っていたから、天に迎えられたのではない。そして、金持ちも死んだ。彼は陰府に落とされ、灼熱の苦しみにさいなまれた。目を上げて見ると、ラザロがアブラハムの懷で、神の祝福に与っている姿が、遥かかなたに見えた。そこで、彼はアブラハムに大声で、「父アブラハムよ、私を憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、私の舌を冷やさせてください。この炎の中で苦しくてたまりません」と、一滴の水で舌を冷やしてくれることを求めた。しかしアブラハムは、「子よ、思い出すがよい。お前は生きていた間に良いものを受け、ラザロのほうは悪いものを受けた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ」と答えた。金持ちは生前、豪勢な生活を満喫し、ラザロは食卓から落ちる食べ物で腹を満たしたいと思うほどであったが、それが逆転し、金持ちは陰府で苦しみ、ラザロは天でアブラハムと共に祝福に与っている。この逆転の理由を記していないが、金持ちは自分の生活を喜び、門前にいるラザロに関心を寄せず、無視した。隣人不在の独りよがり陰府に落とされた原因であろう。一方のラザロは極度に貧しい者へと追いやられ、その者を神は顧みてくださるという主イエスの思いが、天に迎えられた理由であろう。アブラハムは更に、「そればかりか、私たちとお前たちの間には大きな淵が設けられ、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこから私たちの方へ越えて来ることもできない」と、天と陰府の間には越えられない淵があると言っている。金持ちは「父よ、ではお願いです。私の父親の家にラザロを遣わしてください。私には兄弟が五人いますので、こんな苦しい場所に来ることのないように、彼らによく言い聞かせてください」と求めた。しかし、アブラハムは、「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」と言った。金持ちは、「いいえ、父アブラハムよ、もし、死者の中から誰かが兄弟のところに行けば、悔い改めるでしょう」と懇願した。アブラハムは、「もし、モーセと預言者に耳を傾けないならば、たとえ誰かが死者の中から復活しても、その言うことを聞き入れはしないだろう」と答えた。

主イエスの周りにはラザロのような貧しい人々を取り囲んでいた。ファリサイ派の人々は豊かな生活を満喫していたが、貧しい者への愛を説く律法を無視し、主イエスの神の国宣教の言葉に耳を傾けない。彼らへの警告的勧告として語った譬えであろう。そして、初代教会での、復活した主イエスを信じないユダヤ人の不信を、著者ルカが非難した言葉でもあろう。金持ちたちの隣人不在の非情さは、いつの時代も変わることがない。